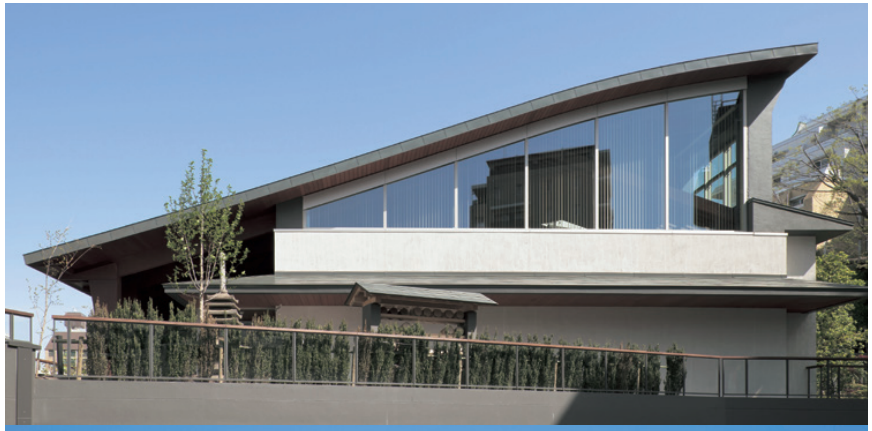


道往寺プロジェクト

これからの仏教寺院を考える

宗教施設を建築するとき、その時代の宗教建築がどのような位置づけにあり、将来に向けてどうあるべきかという問いに答えなければならない。それは宗教・宗派を問わず共通することだと思う。

これは、東京・高輪にひっそりと建っていた浄土宗の古刹、道往寺（どうおうじ）の全面的な建て替え計画であるが、本堂の設計を中心に、そうしたことを書いてみたい。

4年前、この計画の御相談を受けてから最初の2年間は「何を建てるのか」の検討に費やされた。即ち、寺院本来の機能の他になんらかの収益施設を同時に建設するスキームだ。現代では、檀家制度に頼った寺院経営が難しくなっていることは誰もが認めるところであると思うが、御住職には、御檀家さんには出来るだけ御寄進などの御迷惑をかけずに成し遂げたい、という思いがあったと思う。

しかし、そうした検討を進めるうちに、大型の収益施設は御住職と私の中で徐々に否定され、「高輪会館」という公益性の高い貸し会館、寺院用としても使える時間貸し駐車場、新しいタイプの納骨堂、それに本堂など主要施設のオープンな使用形態。という4本柱のもとに、開かれた新しい仏教寺院への模索が始まった。

2階平面図
（中央が本堂）

1階平面図
（右手が参道）

参道から裏の都道にかけての断面図

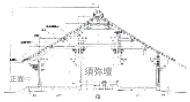
マスタープラン

建築される施設要素が前章のようにかたまりつつある中で、マスタープラン上、繰り返し語られたのは「本堂が主役」という言葉だった。お寺なのであたりまえ、といえばそれまでだが、本堂のあるべき姿では妥協しないということだったと思う。一方、敷地の高低差をマスタープラン上で解消しなければならないという命題もあった。敷地は第一京浜から伸びる参道と、裏の伊皿子坂の接道部分の間で約8メートルの高低差があり、江戸時代からの古い墓地は敷地南側の樹木の鬱蒼と茂る小高い山の上に在って、全体にすり鉢状の地勢である。これらを解決するために、本堂などの寺院施設を全て2階に配置し、伊皿子坂や山の墓地と同一レベルに置くことにした。山門から入った庭に面したレベルが1階で、そこに高輪会館を置く。高輪会館は主に家族葬などの小規模な葬儀に使われるが、御施餓鬼などのお寺の行事の他、地域の催事などにも使われる予定である。山門から本堂へは納骨堂上部の庭園を回遊して登る動線の他にエレベータも設置することになった。本堂とともに重要な施設である観音堂を山門からの主軸近くに置き、本堂は山を背に置く配置となった。

内部構成について

御仏が主役

平安期まで、多くの仏教寺院は本尊を建物中央に据えた形式をとっており、人間は建物外から拝むものであった。本尊の安置された中央部の天井が高い断面計画も、このような成立条件から生まれた。又、堂の方向性も回遊性を持ったものが多かった。本計画の本尊は、こうした時代に造られたものである。



浄土寺浄土堂断面

唐招提寺金堂断面

人間が主役？

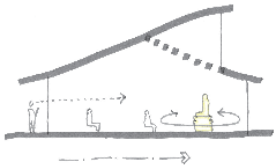
その後、人が堂内に入る形式になるに従い、一方向的な平面形式になったにもかかわらず、建築の形状は中央部の高い従来の形態が存続したため、本来は天井の高い空間に安置されるべき本尊は天井が低く薄暗い「奥」に追いやられる。

浄土寺浄土堂阿弥陀三尊
堂の中心に阿弥陀三尊の立像がある。堂は小屋裏をあらわにした雄大なつくりで、背面（西面）の蔀戸を開放すると、山の木々が借景となり、夕刻には夕日で堂内が荘厳な色に染まる。

方向性の強い堂内であっても、本来、本尊の居所が最も『高い空間』であるべきと考える。

しかしながら、長い年月の間に心の内に培われた『お寺のイメージ』もまた重要である。

裏堂（位牌堂）との連続によって、回遊性をとりもどすことができる。



与件、既定のイメージ

都市部では貴重な、豊富な緑地を背景に生かし、精神的に開かれた寺院を目指す。

死ぬ時だけお世話になるというお寺のイメージから脱却し、仏前結婚式の施行なども企画する。

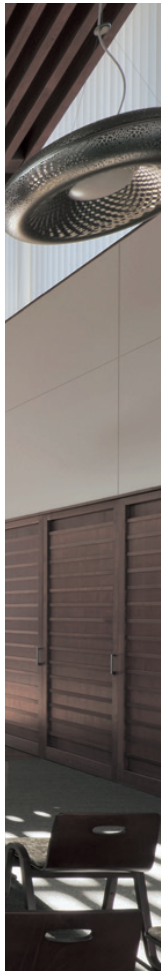
計画の概念

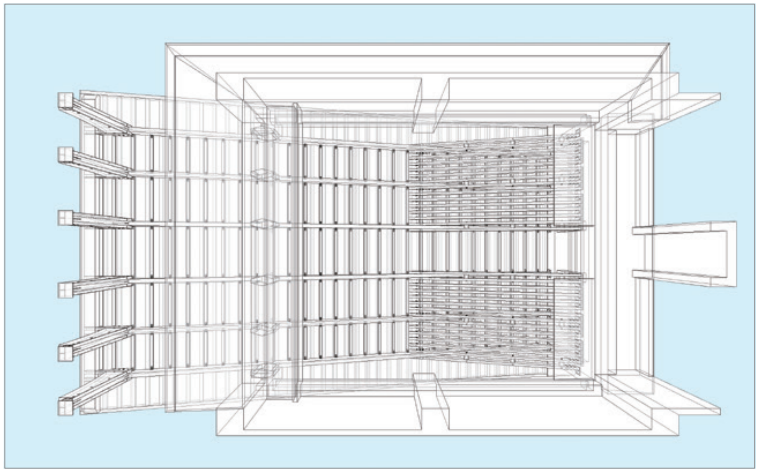
本堂の設計思想

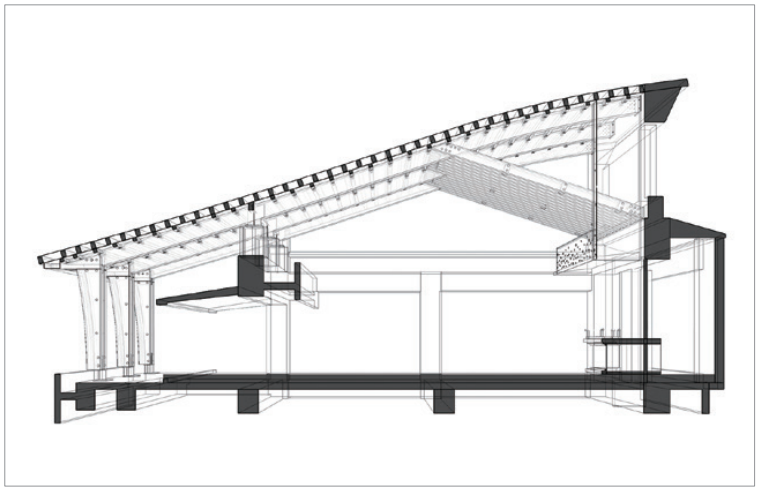
「閉じた本堂から開いた本堂へ。」それが本堂の設計思想の根幹にあったと思う。それは形態的なものではない。つまり、檀信徒の方々が使うだけでなく、広くさまざまな使用方法を想定するという意味である。広く、と言っても無制限に広げるわけではなく、お寺本来の「布教活動の一環」ないしは「人の心を救う」ものとして認められる範囲であって、具体的には「仏前結婚式」「音楽会」「講演会」などがそれにあたる。

それを受けて、建築的にどう考えるか。上図は、最初に本堂の設計をプレゼンテーションしたときに添付した解説用のスケッチであるが、この中に堂内の空間に関して考えたことがまとまっている。簡単に言えば、これからの本堂の使い方に、鎌倉期以前の堂内空間の意味性を導入するという作業だったように思う。具体には、本尊がいちばん高みに座す。自然光（天空光）による演出。人は遠方からでもそれが拝める。などで、そうした思想と、山を背にし、そこの樹木を借景にした須弥壇や、南を背にした配置から生まれた光筒と呼ばれたトップライトなどが組み合わさることで、本堂空間の概念はわずか数日で決まり、最後まで変わることはなかった。

（写真１）本堂内観







本堂の構造ドローイング

本尊がいちばん高みに座す

これは、空間的な高み、つまり天井の高い位置に座すという意味で、古い寺院の須弥壇は御堂の中央にあることから、初期の仏堂建築の思想はそうであったと推測される。そして、人は建物の外から拝むものだった。人が堂内に入り本尊が奥に配置される方向性の強い現代の本堂においては、屋根は片流れであって然るべきという考え方が、この本堂の外形を決めている。この形状は同時に土地の起伏にも馴染んでいる。しかし片流れの内部空間は「お寺的」ではなく、視線も御本尊に集中しにくい。そこで、長辺方向の登り梁に頬杖材をルーバー状に掛けることで、内部空間は切妻空間に見えるようにした。頬杖ルーバーの隙間からは、南向きハイサイド窓から入った光が堂内に漏れ落ちる。登り梁は中央２本の間隔が２メートル、左右にいくに従って２５０ミリずつ狭くなることで、本尊の座すセンターラインへの求心性を高めている。

自然光による演出

教会建築の多くがハイサイド窓からの自然光を取り入れているのに対し、仏教建築では蔀戸からの床に反射した光などに見られるように、反射、拡散された光を利用する場合が多い。これは光の性質の好みでもあろうが、漆などの仏像の仕上に対して紫外線による劣化を防ぐ知恵であったのかもしれない。

この本堂の場合は、両側壁上部の他、須弥壇背面のほとんど全面がガラス面であり、従来の仏教建築に比べるとまずは圧倒的に明るい（写真１）。これら全ての開口部にLow-E合わせガラスを使用して紫外線のほとんどをカットしているが、須弥壇のある内陣と、列席者の座る外陣とでは光の性質を変えてある。

内陣においては、南向きの背面窓から床に反射した光と背面高窓から「光筒」と呼ぶことにした高さ４・５メートルの筒状の空間を経由した拡散光によっている。この光筒の下面は本尊阿弥陀如来像の直上に開口しており、その周囲に「ようらく」を吊り下げている。「ようらく」は本来は仏天蓋という仏像上部の傘のようなものの周囲に下がる装飾で、浄土の光を抽象化したものだと思うが、ここでは文字通りの天空の光が天蓋になっていることになる。

一方、外陣においては直接光を主体とする計画になっていて、先の光筒表面に穿たれた無数の小さな開口から漏れる光と、背面高窓

（写真２）本堂向拝

からの光が構造ルーバーの間隙から漏れる光が渾然となった「木漏れ日状の光」。それに側壁上部のハイサイドサッシュからヴァーティカルブラインドを通した光が加わる形で、これらは季節や時刻で刻々とその姿を変える。光筒に穿たれた開口は「散華」と呼ばれる落慶法要などで撒かれる蓮の花弁をかたどった紙片の形である。

人は遠方からでも拝める

先に述べたように、この本堂は平安期までの仏教寺院のヴィロソフィを復活しようとしたところがあり、その中でも重要なのは内外の関係であると思う。その時代、本堂は御仏と修行者のための空間で、大衆はその外から拝むものであった。つまり本堂は本質的に外部に対する開放性を有しており、内外は連続させうるものだったと感じるのだ。大衆が堂内に入る今日にあっても、その思想には魅力がある。お寺がお檀家さんだけでなく広く地域や社会と繋がる意思表示ときっかけになるからだ。

本堂の前面は、室内廊下との間の板戸が全開放出来るようになっている。この室内廊下は大屋根の下の裳階（もこし）状の庇の下にあり、その外にガラススクリーンで仕切られた外部空間の向拝（こうはい）が在る（写真５）。向拝

（写真３）本堂への階段中間より

（写真５）本堂前の廊下と向拝

（写真４）山門より本堂と観音堂を見る

は大屋根と列柱に囲われた本堂への動線でもあるが、ここから直接御本尊を拝むこともできるのである（写真２）。さらに言えば、山門を入って本堂に至る徒歩動線は庭園内を回遊する緩い階段で構成されているが、その中間点である本堂正面の位置に本堂を眺めるのに最適なポジションを設計し、そこからは本尊を真正面に見ながら本堂の向こうにある木々までを見通すことが出来るようになっている（写真３）。

敷地は山門と背面道路の二カ所で接道しているので、計画当初は「通り抜けが出来ないようにしたい」という御希望もあった。しかし、落慶以来、山門も裏門も日中は開いており、それが私にはとてもうれしい。お弁当を食べるために庭で腰をおろすサラリーマンやOLであっても、近道のために通り抜ける人であっても、その中で阿弥陀様や観音様とお話が出来れば、そうした情景が都市におけるお寺のひとつの姿として私がイメージしていたそのものだからなのだ。

来迎山　道往寺

建 設 地：東京都港区高輪2-16-13
用　　途：寺院、庫裡、多目的ホール、納骨堂、他
敷地面積：2339.76㎡（墓域を除く）
建築面積：871.24㎡
延床面積：1239.78㎡
構造規模：鉄筋コンクリート造、一部木造、3階建
建 築 主：宗教法人 道往寺（代表役員：柏昌宏）

設計監理

統　　括：小川真樹建築綜合計画（小川真樹、野口淳、金井直隆＊元所員）
構　　造：基本計画／播設計室（播繁）
　　基本設計／三原構造事務所（三原良樹）
　　実施設計監理／バッソン（木村修、市川達也、吉田裕一）
設備設計：大野恭成
電気設計：田中電気設計事務所（田中秀雄）

設計協力

寺院コンサルタント：日本建築山田設計室（山田隆司）
インテリア：デザイナーズスタジオ（清田直美）
外 構 植 栽：オーサキランドスケイプ（大崎馨、森川幸子）

建築施工

統　　括：松井建設（若松一雄、杉浦恭平）
設　　備：日比谷総合設備（久保田真由）
電　　気：昌立電機（江田孝雄）

その他工事

仏像新造、修復：長南文化財修復室（河本雅史、久保暁子）
荘 厳 仏 具 製 作：安田松慶堂（安田元慶、星野家康）
納骨堂企画施工：いせや（中本隆久、宮崎邦英）
石工事企画施工：小林石材工業（小林善勝、小林善行）
墓地等植栽工事：日本チッタ（會澤伸憲、會澤栄未）

工　　程

企画期間：2009年 3月～2011年 2月
設計期間：2011年 3月～2011年10月
工事期間：2011年11月～2013年 2月（外構含む）

撮影：山田新治郎

有限会社 小川真樹建築綜合計画

東京都港区六本木5-16-5-402
Tel.03-5573-9192　Fax.03-5573-9193　http://m-a-t.jp